HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自由主義と経済哲学 : 序説
Author(s)	橋本, 努
Citation	經濟學研究, 73(1), 29-35
Issue Date	2023-06-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89775
Type	departmental bulletin paper
File Information	ES_73(1)_029.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経 済 学 研 究　73－1
北 海 道 大 学　2023.6

自由主義と経済哲学　序説[1)]

橋　本　　努

1. この本の目的

本書は，現代の経済思想に照らして，自由主義の新たな理念を提示する試みである。

現代経済思想の発展は，大まかに言って，二つの時期に分けることができる。第一の時期は，20 世紀初頭から冷戦の終わり（1989 年）までであり，第二の時期は，冷戦の終わりから現在にいたるまでである。

第一の時期は，パラダイム科学としての経済学が確立する一方で，経済思想における中心課題は，自由主義体制と社会主義体制の思想的闘争に，決着をつけることであるとみなされた。ところが 1989 年の東欧革命によって，東欧諸国における社会主義の体制が自壊すると，自由主義の体制と思想は，その正しさが証明されたとみなされた。反対に，社会主義の体制は誤りであるとみなされ，その思想は大きな試練に立たされた。

当時の東欧革命を受けて，世界的なベストセラーとなった本に，フランシス・フクヤマ著『歴史の終わり』がある［Fukuyama 1992］。フクヤマは同書のなかで，世界史はヘーゲルのいう「市民社会」と「国家」の実現をもって終わると論じた。フクヤマは，西側の自由主義体制の勝利を，ヘーゲルの歴史哲学に基づいて正当化し，反対に，ヘーゲルの市民社会を超えるマルクス的な共産主義の到来を否定した。このフクヤマの議論にはさまざまな批判も提起されたが，当時の人々は，このフクヤマのビジョンと自由（民主）主義体制の勝利をおおむね受け入れた。

もちろん，リベラルな体制には，さまざまなタイプがありうるだろう。それは個人主義志向の社会であるかもしれないし，コミュニタリアニズムの社会であるかもしれない。それはまた平等主義の社会であるかもしれないし，保守主義の社会であるかもしれない。こうしたさまざまなイデオロギーに基づく社会のなかで，私たちは，どのようなタイプの市民社会と国家を望ましいとみなすべきであろうか。冷戦構造が崩壊してから，現在にいたるまでの現代経済思想の第二の時期は，どのタイプの自由主義体制が望ましいのかについて，倫理的な議論を展開するようになった。

冷戦構造の崩壊によって，自由主義の体制は勝利をおさめたとはいえ，その思想は多くの挑戦に直面した。自由主義の概念は，もはや自由主義体制の支配的なイデオロギーを表現するものでは必ずしもなくなった。自由主義は，倫理的な次元で，さまざまなイデオロギーとの拮抗関係に立たされる一方で，新自由主義，古典的自由主義，リバタリアニズム，福祉国家型自由主義など，さまざまな形態を取りうることが明らかになった。冷戦後の現代経済思想は，自由主義と社会主義の体制選択の問題から，さまざまなイデオロギーの倫理的な選択の問題へと移った。

私は，ちょうど冷戦構造が崩壊した時期に大

1）この論文は，以下の本の序論（Introduction）の日本語訳である。Tsutomu Hashimoto［2022］Liberalism and the Philosophy of Economics, London: Routledge, pp.1-8. DOI: 10.4324/9781003294207-1

学院に進学して経済思想の研究を始めた。その頃の経済思想は，過渡期を迎えていた。冷戦期の経済思想においては，科学方法論が重視されていた。自由主義体制や社会主義体制を正当化するための科学的な基礎が求められていた。これに対して冷戦後の経済思想は，科学方法論がレトリックの一部にすぎないことを明らかにし[2)]，他方で，ますます倫理的価値の問題を問うようになった。そしてまた，これらの倫理的価値の問題は，もはや科学的に厳密な方法論によって決着することはできないとみなされるようになった。

私はこれまで，私の研究人生を通じて，経済思想と自由主義の関係を研究してきた。最初は，カール・ポパー，ルードウィッヒ・フォン・ミーゼス，フリードリッヒ・フォン・ハイエクなどの自由主義思想に関心を寄せた。そして自由主義体制と社会主義体制の思想闘争について探求した。しかしその後は，自由主義の多様な形態と哲学を検討するようになった。私はこれまで，日本語で 10 冊以上の研究書を著してきた。それらの本は，自由と自由主義をめぐる探究を含んでいる。私は自由と自由主義の問題を，経済倫理，国際政治学，政治思想，社会学，法哲学などの領域を横断しながら探究してきた。経済思想の問題を中心に据えつつ，より広い領域の知見をふまえて検討してきた。

本書の大部分は，私がこれまで日本語で出版した著作のなかから，理論的に重要と思われる部分をセレクトして収めたものである。本書はモノグラフではなく，長い期間にわたる私の研究の選集である。それゆえ，各章は強く結びついているわけではないが，本書はこれまでの私の研究史を一望できる内容になっている。その中心的テーマは，経済思想の観点から自由主義の理念に光を当てることである。

現在，自由主義の思想は，さまざまな思想との競合関係におかれているだけでなく，自由主義の内部にも，さまざまなタイプがある。規範理論としての自由主義を正当化するためには，私たちは合わせて，どのタイプの自由主義を倫理的に正当化するのかという問題にも応じなければならない[3)]。しかし現在，どのタイプの自由主義も，強固な哲学的基礎をもっているわけではない。そこで問うべき問題は，どのようなタイプの自由主義に，どのような哲学的基礎を与えうるのかである。そしてまた，どのタイプの自由主義を，いっそう魅力的な思想として提示できるかである。

私は本書において，現代経済思想の研究をふまえて，「成長論的自由主義（growth-oriented liberalism）」と私が呼ぶ思想を展開している。この思想は，着想としては，ハイエクのいう「自生的秩序」をある方向に発展させたものである。しかしその政策的な含意は，ハイエクの思想とは異なっている。私はこの成長論的自由主義の思想を，私が作った造語で「自生化主義（spontanietism）」とも呼んでいる。本書は，この成長論的自由主義の思想を展開したものであり，またこの思想を背後で支える現代経済思想研究の成果である。

本書は，三つの部に分けて構成される。第Ⅰ部は，私が成長論的自由主義と呼ぶ思想の展開であり，本書の中心をなしている。第Ⅱ部は，20 世紀初頭から冷戦構造崩壊にいたるまでの現代経済思想の内容を，自由主義の視点から検

2）経済学のレトリックについて，すでに冷戦末期において，McCloskey［1985］が刊行されている。その後，マクロスキーはレトリックの方法論を展開する。その展開を検討した研究として，Balak［2006］を参照。

3）例えば，Bavetta *et al*［2014:1］は，「自由の経験的尺度のために，三つの自由概念を区別する。すなわち，選択の機会（消極的自由），選択のケイパビリティ（積極的自由），選択の自律（自律的自由）である」。そして Bavetta 等は，これら三つの自由を最大化する自由主義を正当化する。しかしこれらの自由がトレードオフの関係にある場合には，どの自由がいっそう重要であるかについて，私たちは価値判断しなければならない。

討したものである。第Ⅲ部は，冷戦構造崩壊から現在にいたるまでの現代経済思想の内容を，自由主義の立場を相対化しながら検討したものである。さまざまなイデオロギーの立場の類型論を構築し，そのなかに自由主義を位置づけている。

私が本書で成長論的自由主義と呼ぶ立場は，20 世紀初頭から冷戦構造崩壊にいたるまでの，自由主義陣営の経済思想にそのルーツをもっている。そしてまた，成長論的自由主義は，冷戦後の思想空間においては，他の思想と競合する一つの自由主義思想である。冷戦崩壊後，自由主義の体制は，唯一の正しい体制であるとみなされたとはいえ，この体制の内部にも，さまざまな思想がある。経済倫理の観点からみれば，自由主義は，唯一正しい思想というわけではない。またその特殊形態である成長論的自由主義も，唯一正しい自由主義であるというわけではない。自由主義，および成長論的自由主義は，経済倫理の次元において，さまざまな思想との競合関係にある。そのような多元的で競合的な思想状況において，私は成長論的自由主義が，一つの思想として魅力的な内容をもつことを示したい。

2. この本のアウトライン

2.1　第Ⅰ部　第一章〜第三章

第Ⅰ部は，成長論的自由主義の哲学的基礎の概観である。第一章は，本書の中核であり，「実質的自由」の理論を展開している。I. バーリンによれば，自由には消極的自由と積極的自由がある。バーリンは，積極的自由が自己支配の理想から集団的支配へと拡張される危険について論じた。これに対して私は，消極的自由にもまた二つのパラドクスがあるがゆえに危険であると指摘する。その一つは，日常的な自由と洗練された価値のあいだのパラドクスであり，もう一つは，解放とアパシーのパラドクスである。私たちは，これら二つのパラドクスをいかにして克服することができるだろうか。この問題に応じるために，私はチャールズ・テイラーの積極的自由論を検討する。積極的自由の概念は，テイラーのコミュニタリアニズム的な擁護論を超えて，リベラルな観点から擁護することができる。積極的自由は，ある特定の価値への自由としてではなく，実質的な自由として理解することができる。またその場合，実質的自由の理念は，次の三つの原理を通じて，自由主義の社会を築くことができる。すなわち，卓越（誇り）原理，生成原理，分化原理である。私はこれらの原理を，G. ジンメルの社会学的洞察に基づいて理論化した。これらの原理は，成長論的自由主義の社会学的な基礎である。

第二章は，第一章を補うために，現代の消極的自由論を検討している。バーリンが指摘した積極的自由のパラドクス，すなわち，それが恐ろしくも集合体に人格化されるというパラドクスは，現代の経済思想研究においても，依然として大きな影響力をもっている。積極的自由の概念を用いると，それは全体主義や集産主義に譲歩することになるのではないかという疑念が，自由主義の内部にある。このような疑念があるため，私たちは思想研究において，積極的自由の概念をうまく用いることができない状況にある。だがその結果として，私たちは，消極的自由概念をインフレーション的に利用するという，困った状況に直面している。私たちは，多くの理想を消極的自由の概念のなかに詰め込もうとしている。バーリンは，消極的自由を徹底的に擁護するリバタリアンではなく，価値多元主義者であり，消極的自由の概念に必ずしも満足していなかった。この章において私は，消極的自由の概念をカテゴリー的に明確にすることを通じて，この概念のインフレーション的な利用を制約することを提案したい。

第三章は，成長論的自由主義の哲学的基礎について論じる。第一章では，私は「実質的自由」を制度化するための三つの原理を，ジンメルの社会理論を基礎にして提示した。本章で

は，これらの三つの原理の背後にある哲学を展開する。また，ハイエクの自生的秩序論を，ある方向に発展させている。その要点は，社会の秩序が自生的に発展するために，その土壌づくりを作為的に行うべきである，というものである。私はこの考え方に基づいて，リベラルで成長に方向づけられた自生的秩序の哲学を発展させている。日本語で著した著書『帝国の条件』では，私はこの哲学に基づいて，国際貨幣制度や関税制度に関する新たな政策論を展開した［Hashimoto 2008］。本章においてはしかし，自生化の哲学を簡単に紹介するにとどめる。

本書の第Ⅱ部と第Ⅲ部は，現代の経済思想の研究であり，以上の第Ⅰ部に展開した成長論的自由主義の哲学を補うものである。私は第Ⅱ部と第Ⅲ部において，自由主義および成長論的自由主義の哲学を，現代経済思想の文脈に位置づける。先述したように，現代の経済思想研究は，二つの時期に分けることができる。第一に，20 世紀初頭から東欧革命までの時期であり，そこにおいては方法論が重視されていた。第二に，東欧革命から現在にいたるまでの時期であり，そこにおいては経済倫理の研究が重視されるようになった。そこで本書では，第Ⅱ部で方法論の問題を論じ，第Ⅲ部で経済倫理の問題を論じる。

2.2　第Ⅱ部　第四章〜第七章

第Ⅱ部は，方法論に関する経済哲学に照らして，自由主義の意義を論じる。

第四章は，社会科学方法論の目的と意義について検討する。20 世紀初頭から東欧革命にいたるまで，経済思想の中心問題は，自由主義と社会主義のあいだのイデオロギー闘争に決着をつけることであった。この闘争は，どちらの主張が科学的に正当化できるかをめぐって争われた。F. エンゲルスは，社会主義は科学であると主張したが，これに対して L. ミーゼスは，社会主義において人々は経済計算の不可能性に直面すると論じ，社会主義の下での経済計算を科学的に批判した。では，エンゲルス以降の社会主義イデオロギーと，ミーゼス以降の自由主義イデオロギーのいずれが科学的に正しいのか。この問題は最終的に，どちらの科学方法論がすぐれているのかという方法論研究において争われた。この時期の経済思想は，科学方法論によってイデオロギーの問題に決着を与えることを中心課題としていた。この時代に，自由主義陣営の L. ミーゼス，K. ポパー，F. ハイエクは，それぞれ独自の科学方法論によって，社会主義陣営の科学方法論を批判し，独自の科学方法論を展開した[4)]。ところが冷戦が終結すると，方法論による自由主義の正当化は，しだいに不要になるだけでなく，ほとんど不可能になる。本章ではその理由を説明する。自由主義陣営の方法論は，方法論によって自由主義の体制を擁護することに，必ずしも成功したわけではない。方法論の一部は，社会主義陣営の論客たちによって共有され，他の一部は，論理内在的に批判された。本章は，社会科学の方法論がもはや，自由主義を正当化するための論拠（argument）としては，あまり有効ではなくなったことを示す[5)]。

第五章は，社会科学方法論の機能理論を展開する。私見によれば，社会科学方法論は，科学の営みを制御するための，五つの機能をもっている。すなわち，正当化，発見法，領域設定，自己了解，限界論である。私はさらに，これらの機能に加えて，社会科学の方法論が，価値操

4）ミーゼス，ポパー，ハイエクは，科学の時代における自由主義思想家であった。彼らの立場をまとめて「科学的自由主義」と呼ぶことができるかもしれない。ハイエクは，科学主義を批判したが，社会科学の言説はたんなるレトリックではなく，科学主義的ではない科学方法論があると主張した。ハイエクもまた，科学を批判したり正統化したりするための方法論を重んじていた。

5）この有効性に関する本章の議論は，私の日本語の著作［Hashimoto 1994］の議論の要約部分であり，詳細な分析については，同書の第一章から第四章で展開した。

作の機能をもっていること，なかでもとりわけ，「思想負荷性」の機能をもっていることを指摘する。社会科学の方法論は，思想的な価値を負荷している場合がある。しかしそれは，あるいくつかの仕方で「脱負荷」することができる。これまで社会科学の方法論は，自由主義体制と社会主義体制のあいだの選択問題に，最終的な答えを与える研究であるとみなされてきた。しかしその企ては，実際には困難に直面する。方法の思想負荷性が，論理的に成立しなくなる場合があるからである。本章は，この問題に理論的な答えを与えている。

以上の二つの章（第四章と第五章）は，次のことを示している。すなわち，自由主義の思想は，もはやこれを科学的に正当化することは難しい。私たちは自由主義を擁護するための，新しい論拠を見つけなければならない。

第六章と第七章は，M. ウェーバーの方法論を検討する。ウェーバーは，一般に社会学者とみなされているが，彼はミーゼスと同様に，社会主義経済における財の分配の合理的計算可能性についても研究している［Weber 1918］。彼はまた，その理由を，独自の社会科学方法論によって基礎づけてもいる。ウェーバーは，社会主義経済計算論争におけるもう一人の論客であり，方法論と自由主義の関係について，独自の貢献をなしている。

第六章では，ウェーバーの方法論，とりわけその主体論の側面について論じる。20 世紀の日本においては，ウェーバーの方法論は，近代社会における自律した個人（「主体」）を基礎づける哲学であるとみなされた。そしてこの哲学をさまざまに解釈する研究が展開された。日本ではウェーバーに関する研究が，本国のドイツよりも発展した[6)]。本章では，この「自律した個人」をめぐるウェーバー研究の展開を検討する。ウェーバーにおける「主体」の理念は，これまで自由主義と社会主義の体制選択問題とは切り離して，近代社会の基礎として論じられることが多かった。しかしウェーバーは，社会主義の経済体制に反対し，また福祉国家の経済思想を批判するための方法論的視点をもっていた。例えば「価値自由」論は，その一つである。主体を基礎づけるウェーバーの方法論は，自由主義と親和的な方法論であると解釈できる。本章では新たに「問題主体」というモデルを，ウェーバー方法論の新たな解釈として提示したい。この「問題主体」のモデルは，自由主義の新たな哲学的基礎を与えるであろう。

第七章では，この「問題主体」のモデルがもつさまざまな特徴を，「近代主体」との対比によって論じる。まず，「主体」とは何であるかについての理論を示し，次にこの理論をベースにして，「近代主体」と「問題主体」の特徴をそれぞれ明らかにする。最後に，この「問題主体」のモデルが，本書で展開する「成長論的自由主義」の哲学的基礎を与えると論じる。ウェーバーの方法論に通じていない読者は，もしかすると，この主体の問題が社会科学方法論の問題とはあまり関係がないと思われるかもしれない。しかし社会を認識する方法は，同時に，その方法を用いた知の実践を通じて，人間が社会とどう向き合うべきかという問題に，一定の方向性を与える。その方向性は，人間をどのように陶冶すべきであるかという問題に，部分的に答えるものである。このように社会科学の方法論は，人間の陶冶の問題と結びついている。ウェーバーおよび日本のウェーバー研究においては，このような問題が探究されてきた。

2.3　第Ⅲ部　第八章～第一〇章

最後に第Ⅲ部は，経済倫理に関する経済哲学に照らして，自由主義の思想を位置づける。

冷戦構造が崩壊すると，自由主義の体制は，社会主義の体制に対して勝利したとみなされた。しかしポスト冷戦期においては，この体制選択の問題とは別に，経済倫理の次元で，多様なイデオロギーが競合するようになった。自由

6）Schwentker［1998］を参照。

主義の内部にも，さまざまな立場があることが顕在化した。これらの思想のなかで，どれが正しい思想であるのかを決めるための科学的な規準は存在しない。私たちはいずれの立場が望ましいのかについて，経済倫理の研究を通じて明らかにしなければならない。

経済倫理を論じるときに重要な点は，二つある。第一に，私たちは自分の倫理的な立場を選択するときに，できるだけ一貫した立場を展開すべきである，ということである。イデオロギー的な立場を一貫させるためには，さまざまな性質の経済倫理問題を理解するとともに，さまざまな立場が拮抗している状況について理解しなければならない。第二に，経済倫理の有効性は，時代の大きな流れのなかで与えられるという理解である。かつてウェーバーは，プロテスタンティズムの経済倫理がしだいに資本主義を駆動する倫理としては有効ではなくなったと論じた［Weber 1988］。では現代の社会において，私たちはどのような経済倫理を必要としているのだろうか。自由主義の問題に即していえば，私たちは，どのような経済倫理によって，時代を駆動する自由主義を基礎づけることができるのか。第Ⅲ部では，これらの問題に即して，経済倫理の問題を検討する。

第八章は，経済倫理の類型理論を展開する。現代の経済倫理は，次の四つの二択問題に対する答えによって，一六類型に分けることができる。(a) 企業は，短期には損失を被るとしても，あるいは社員に不利益を強いるとしても，長期的な視野に立って道徳的に行動すべきであろうか。(b) 経済政策や制度の理念として，「公正」と「秩序の安定・成長（全体の利益）」のいずれを優先する社会が望ましいだろうか。(c) 企業が連帯的ないし家父長制的な組織を保持したい場合には，それを自由に認めるべきであろうか。それとも，どの企業であれ，組織内部において開かれた人間関係を構築すべきであろうか。(d) 企業は，基本的には金儲け第一主義で行動してよいだろうか。それとも，社会全体のなかに，倫理の一翼を担う存在として包摂されるべきであろうか。

以上の四つの問題には，それぞれ二つの答え方がある。その答えを組み合わせると，全部で一六通りの立場になる。経済倫理には，つまり一六個の可能な立場がある。本章では，規範理論に即して，この一六通りの立場を類型論的に析出する。これらの一六類型のイデオロギーのなかには，これまでイデオロギーとして論じられてこなかったものもある。私はこの類型理論を通じて，これまで論じられたことのない，新しいタイプの自由主義があることも指摘したい。

第九章は，経済倫理をめぐって，もう一つ別の類型理論を提示する。前章の類型理論を第一理論と呼ぶならば，本章の類型理論は，第二理論である。この第二理論は，自由主義の立場を自律型とヒューマニズム型の二つに分け，合計で四つのイデオロギー的立場を区別する。そしてこれらの四つの立場の含意を，以下の六つの具体的な問題に即して，明らかにしている：(1) 派遣社員を減らすべきか，(2) マクドナルドのようなファストフード店を廃止すべきか，(3) タバコを規制すべきか，(4) グレーゾーン金利を撤廃すべきか，(5) ホワイトカラー・エグゼンプションを導入すべきか，(6) 会社は誰のものか。以上の分析は，自由主義の内部にも，倫理的な緊張関係があることを明らかにするであろう。

第一〇章は，時代の大きな流れのなかで，自由主義の倫理的な有効性を検討する。ここで時代の大きな流れとは，近代社会のモードの推移であり，私はそのモードを，戦後日本社会の歴史に適用して三つの段階に分けている。すなわち，近代のモード，ポスト近代のモード，そして私が「ロスト近代」と呼ぶ時代のモードである。おそらく戦後の日本だけでなく，近代化を遂げた多くの国々においては，これら三つのモードを歴史的に経験してきたにちがいない。この三つのモードは，近代化の歴史を理解する

ための，ベーシックなスケッチを与える。それぞれの時代には，資本主義を動かすための倫理的構造ないし「駆動因」がある。ではロスト近代のモードにおいて，資本主義の可能な倫理とはどのようなものか。私見では，ロスト近代の時代においては，ネグリ＝ハートのいうマルチチュード，A. センのケイパビリティ，そして市場競争の第五の軸に関する理論が，すべてその駆動因に関係している。これらの理念は，自由な社会の新しい条件と理念を提供するであろう。本章において私は，成長論的自由主義の思想が，このような時代の倫理的要請と密接に結びつくことを明らかにしたい。

文献

Balak, Benjamin［2006］*McCloskey's Rhetoric: Discourse ethics in economics*, London: Routledge.

Bavetta, Sebastiano, Pietro Navarra and Dario Maimone［2014］*Freedom and the Pursuit of Happiness: An economic and political perspective*, New York: Cambridge UP.

Fukuyama, Francis［1992］*The End of History and the Last Man*, New York: Free Press.

Hashimoto, Tsutomu［2008］*Conditions of Empire*, Tokyo: Kobundo（Teikoku no Jouken, in Japanese）.

McCloskey, Donald N.［1985］*The Rhetoric of Economics*, Brighton: Harvester Press.

Schwentker, Wolfgang［1998］*Max Weber in Japan: eine Untersuchung zur Wirkungsgeschichte 1905-1995*, Tübingen: Mohr Siebeck.

Weber, Max［1918］*Der Sozialismus*, Wien: Phöbus.

Weber, Max［1988］*Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I*, 9 Auflage, Tübingen: J. C. B. Mohr（Paul Siebeck）.